

## あの日から80年 武蔵野・平和への取り組み

第2次世界大戦末期の昭和19(1944)年11月24日。武蔵野町(現在の武蔵野市)は首都圏で初めて米軍のB-29による空襲を受け、その後も度重なる空襲によって多くの方が犠牲となりました。二度とあのような悲劇が起こらないよう、市は11月24日を「武蔵野市平和の日」に制定しています。あの日から80年。市がこれまでどのように平和への取り組みを続けてきたのか、改めて振り返ってみましょう。



▲昭和19年11月24日に日本上空へ飛来するB-29爆撃機

### あの日あのか 武蔵野で何が起こったのか

昭和19年11月24日、マリアナ諸島を飛び立った米軍の戦略爆撃機B-29が日本の上空へと飛来しました。アメリカ軍が首都圏で最初に標的にしたのは武蔵野町でした。それは、武蔵野が農村から町へと移り変わる中、日本の戦時体制の強化に伴ってこの地に軍需工場が建てられていたからに他なりません。米軍は、現在の緑町一帯にあった国内最大級の航空機エンジン工場「中島飛行機武蔵製作所」を爆撃することで、日本の戦力を損なおうともくろんだのです。この日、高度1万メートル

の上空を飛ぶB-29から、武蔵製作所を標的に爆弾が投下されました。工場で働く人たちや周辺の住民、とりわけ小さな子どもたちにとって、それはとても怖い恐怖だったことでしょう。八幡町の延命寺住職・中里崇亮さんは、8歳だった当時のことをこう回想しています。「この日はお昼すぎに警戒警報が鳴り、すぐに空襲警報が鳴りました。私は姉たちと5、6名で集団下校していましたが、仲通りを歩いているときB-29の空襲に遭いました。聞いたこともない地響きとともに、武蔵製作所の西側から煙が上がるのを目撃しました」(「季刊むさしの2020年秋号」より抜粋)

また、関前の地主の長女として生まれ、家の敷地内に日本軍の兵舎や高射砲設備があったという島津好江さんは、10歳のときに体験した初空襲の日について語っています。「警報を受けて班で下校しているとき、今の第五中学校がある手前の通りを歩いていたから、いきなり目の前に爆弾が落ちてきました。50メートルも離れていなかったと思います」(「季刊むさしの2018

### 年夏号」より抜粋)

この後、武蔵製作所を中心とした一帯への空襲は、昭和20(1945)年8月15日の終戦まで計9回も続き、最多とされています。分かっている限りで死者220名、負傷者266名という甚大な被害が出ています。

### 武蔵野の地から 世界平和の大切さを発信

市は戦後になって、こうした戦争の悲惨な体験を教訓として次の世代に伝え、同じ過ちを繰り返すことのないよう平和への願いを込めた取り組みを行ってきました。

三鷹駅北口ロータリーの中央には彫刻家・北村西望が手掛けた「世界連邦平和像」と呼ばれる躍動感のあるブロンズ像が建っています。これは、昭和35(1960)年、世界平和を願って市議会で決議された「世界連邦に関する宣言」の10周年を記念して昭和44(1969)年に建立されたもの。世界平和や地球環境保全など、地球規模で解決すべき問題に取り組む「世界連邦運動協会武蔵野支部(現・武蔵野市世界連邦運動協会)」の活動を象徴す

るモニュメントとして、市の補助金と市民からの募金などによって完成しました。台座には戦時中に亡くなった市民の名簿が納められ、恒久的な平和への願いが込められています。

井の頭自然文化園内には、かつて北村西望のアトリエがあり、ここである有名な長崎県・平和公園のシンボル「平和祈念像」の原型がつくられたことから、その原型をはじめとする西望の彫刻作品が園内と彫刻館に多数展示されています。

昭和57(1982)年、戦後も続く世界での核の脅威に対して、市は兵器の廃絶を願い平和に貢献する意志を表明する「武蔵野市非核都市宣言」を發出しました。さらに平成20(2008)年には、市民らで構成される「武蔵野市非核都市宣言平和事業実行委員会」を設立。同委員会は、戦争に関するパネル展や講演会など、市と共にさまざまな平和啓発活動を継続的に行っています。今年11月24日も、武蔵野市が初めて空襲の被害を受けた日から80年になることから、「武蔵野市平和の日イベント」戦争も核もない世界を武蔵野から」を行いました。

さらに、令和7(2025)年1月には、「平和首長会議」の第12回国内

加盟都市会議総会が武蔵野市で開催されます。平和首長会議は、広島市と長崎市が中心となって核兵器のない平和な世界の実現に向けた潮流を生み出すことを目的とした団体で、世界166の国と地域、約8400の都市が加盟しています(令和6年11月現在)。

「加盟都市の首長が集まる総会で、武蔵野市の平和への取り組みを発表し、市民の戦争体験者の講話を披露するなど、武蔵野から平和の大切さを発信する機会にしたいと考えています」と市・市民活動推進課の丹羽さん。

また、市では戦争体験を後世に残していくため、戦争体験記録集や平和啓発映像の作成も行っています。年々、戦争体験者が高齢化していく中、当時の貴重な話や教訓を記録しておくための時間は決して多くはありません。「職員が直接ご自宅に伺ってお聞きす



▲非核都市宣言30周年を記念して平成24年に作成されたイラスト。武蔵野市平和の木(左:長崎から譲り受けた被爆クスノキ2世、右:市民の木ハナミズキ)がモチーフ



▲令和6年8月のイベントで戦時中の体験を語る島津さん(ステージ右)と中里さん(同中央)

ることもできるので、ぜひ市民活動推進課までお問い合わせください(丹羽さん)。

### 新たな史料から 戦争の姿を多角的に読み解く

「武蔵野ふるさと歴史館」でも、毎年戦争にまつわる企画展を行っています。令和6年7月から10月にかけて行われていたのは「戦争と武蔵野X」映像資料から見るB-29」という企画展でした。同館が新たに収集した米軍制作の映画『Birth of the B-29』は、私たちがあまり目にする機会のないB-29の製造現場が撮影された貴重な映像です。戦時下のアメリカ国民の高揚感がリアルに伝わり、改めて脅威を

覚えます。

また、武蔵製作所の副長(副工場長)を務めた長澤雄次さんの遺族から平成30(2018)年に寄贈された空襲時の様子などを記した手帳の中身も展示。昭和19年12月3日の空襲について、敵機が西の上空から接近してくる様子を「妖鬼の如く頭上に迫り来る」と生々しく表現しています。当時の製作所の幹部の記録はほとんど残っていないため、極めて貴重な史料といえるでしょう。ほかにもB-29の模型展示、尾翼の大きさを再現する床面シートなど、さまざまな角度から恐ろしい爆撃機の全容を読み解くための工夫がされていました。

二度と同じことが起きないようにするためには、そのとき何が起こり、人々がどのようにその時代を生き抜いたか、残された証言や史料から想像力を働かせながら多角的に検証し続けることが必要です。戦争や空襲を「終わったこと」として捉えるのではなく、今も地中に眠る不発弾の問題(季刊むさしの2020年秋・冬号)参照)なども含めて、過去と現在を地続きのこととして捉えられるのが、今を生きる私たちに問われているのではないのでしょうか。